

シューベルトをめぐる

「音楽の都」の名と榮譽を、今も昔も変わらぬに保ち続けているウィーン。ここ数世紀この街に集まり、音楽を栄えさせてきた人々の名を日々並べることがはまらず不可能だろう。それ程ウィーンを中心に活躍した音楽家の数は多い。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン……といった馴染み深い名前の作曲家たちも、みなウィーンに住んでいた。

フランツ・ペーター・シューベルトは、一七九七年一月三十一日にウィーン九区、ヌスドルファーシュトラッセ五十四番地にある家で生まれた。一八二八年十一月十九日午後三時に三十一才の若さで四区、ケッテンブリュッケンガッセ四番地の家で亡くなるまでこの街に住み、よくよくウィーンに縁のある作曲家だった。

容姿、健康には恵まれず（背が低く、小太りの——良く言えばがっしりとした——体格の上に前かがみで近視がひどく、顔色も良くなかったらしい）生涯結婚もしなかったシューベルトは、その短い一生のうちで六百曲以上の歌曲を作曲した。健康に優れなかったのは、二十一才の頃に疾患したと思われる梅毒のせいでもあるようだ。もっとも直接の死因はチフスであった。性格もあまり社交的なタイプではなく、特に女性に對してのコンプレックスと、それに起因する無愛想の度合いがひどかった模様である。

「歌曲の王」と呼ばれているが、歌曲以外にも数多くの器楽曲、特にピアノのための作品、交響曲十曲

（うち九曲が残っている）をはじめとする管弦楽のための大がかりな作品の他に、十五本ものオペラとオペレッタを作曲している。しかしその中の一曲は後日紛失の憂き目に合い、今日ではその存在を想像するしかない。ただオペラはシューベルト自身が興味を持っていたにしては得意とするジャンルとはならず、上記の十五本の作品のうち六本は未完のまま終わっている。

こんな事などから今日では「シューベルトは小品こそたぐいまれなものを数多く残したが、大規模な、計算しつくされた構成力を必要とする作品には向いていなかった」などとして顔で論じられる事が少なくない。ピアノリサイタルのプログラムの中に演奏時間が三十分をゆうに越えるシューベルトのピアノソナタなどを見つけると、コンサートに行く前からまぶたが重くなりそうな気分がしてくるものである。(もちろん短い、手頃なソナタもある)しかし本当にシューベルトの大曲とは、聴衆にとってそんなに「我慢が必要」なものではないのだろうか。

一八二二年七月三日にシューベルトが書き残している「私の夢」という小文を見てみよう。この当時シューベルトは二十五才、有名な「未成交響曲」やピアノストの重要なレパトリのひとつである「さすらい人幻想曲」などが創作され、翌年には「美しき水車小屋の娘」が生まれている。

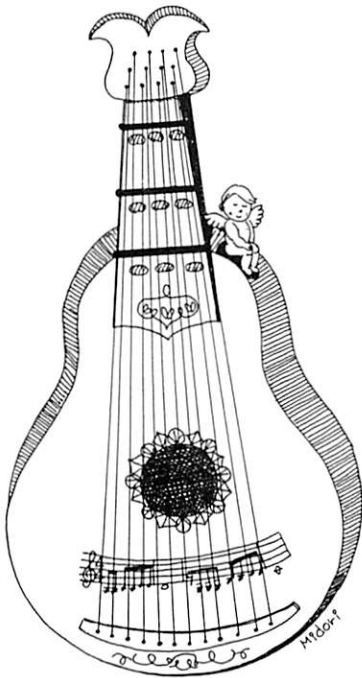
「私には何人もの兄弟姉妹がいる。父も母も優しく、私は暖かい愛情につつまれて育った。ある日父に連れられ、みんなでピクニックに行った。みんなが楽しそうの中で、私だけは悲しく沈んでいた。そこに父親がやって来て、おいしいお弁当を食べなさい、と言う。そんな気分になれない私を見て父は烈火のごとく怒り、「目の前から消えてしまえ!」とどなる。私は逃げるようにして遠い土地へ旅に出る。胸の内に、誰にもわかってもらえぬ溢れんばかりの深い愛情を秘めながら。何年もこの不毛の愛と、身が張り裂けんばかりの苦痛が、私をさいなめる。そこに母の死の知らせが届いた。私はすぐさま家に戻る。悲しみに打ちひしがれた父親は、私が敷居をまたぐのを止めはしなかった。母の遺体をまのあたりにして、涙が止めどもなく流れる。幸せに満ちて過ぎ去った日々のごとく、その頃の幸福な姿そのまま母は横たわっている。

棺に付き添って墓地に行き、棺は地底に沈む。この時より私は再び家に留まる事になった。そんなある日、父親がお気に入りの庭に私を連れて行き、「気に入ったか?」と聞く。私はこんな庭は大嫌いだったが、そ

れを口に出すことはためらわれた。いらいらした様子で父は同じ事を詰問する。小さい声で「いいえ」と答えた私を父親は限りつけ、私は逃げる。胸に報いられない、理解されることのない愛を秘めながら、再び知らない土地へ流浪の旅に出る。何年も何年も私は歌をうたい続ける。しかし愛の歌を歌おうとする心は痛み、苦しみを歌に託すと心には愛が満ちてくる。こうして私は愛と苦しみとに身を裂かれるのであった：』

シュューベルトは望めども相手に伝わることのない愛と、それと常に背中合わせに存在する苦痛・苦悩から逃れる事が出来なかった。同時に「死」を決して敵視せぬばかりか、自分にとって最後に安心して永住できる唯一の安息と感じていたようでもある。

誰も知人のいない見知らぬ土地で満足に安息を得られないままに旅を続ける。小川のせせらぎに慰めを見出し、風になびく木の葉の囁きや小鳥のさえずりに耳を傾け、暗い夜道では月の光、いや、星の光でさえあで味あわなければならぬ孤独と苦悩から、死の手によっていつの日か解放される事を渴望している——このようなナイーブな人間像そのものがシュューベルトではないにせよ、少なくとも彼自身がこのような感情に共感を持っていた事は確かである。それはシュューベルトが美しい歌曲を作る際の詩の選び方などにも端的に表れている。



《死と乙女》 …手をお出し、美しくかわいい娘よ！ 私はおまえの友、罰を与えに来たのではない

い。勇気を持って！ 乱暴はしない、私の腕にやさしく抱かれて眠りなさい：

《粉ひき屋と小川》（『美しき水車小屋の娘』より）　：いとしい小川よ、お前はそれ程にも優しいのか。小川よ、お前にはわかるのかい、愛がどんなものなのか？　ああ、その水底深くの涼しげな安息を！　いとしい小川よ、歌をうたっておくれ：

《小川の子守歌》（同前）　：おやすみ、おやすみ、目を閉じて！　疲れ切った旅人よ、お前は帰って来たのだよ。ここでは誰も裏切らない、私のもとで寝ておいで。海が小川を飲み込んでしまうまで：

《さすらい人》　：太陽がここではとても冷たく思われる。花は萎み命は老いた。それらが語るのも、空しい響きでしかない。私はどこでもよそ者。お前は何処なのだ、私の愛する地は？　捜し求め、予感にしても、見つからない！　希望の緑が萌える土地、私のバラの花開く土地、友人達が散策を楽しみ、死者達もよみがえる。私の言葉が話される土地、おお、お前は何処だ？　私は寡黙にさすらい、心は晴れぬ。溜め息のみが「どこ？」と問えば悪霊が囁き返す。「お前のいない所、そこにこそ幸福があるのさ！」

《道標》（『冬の旅』より）　：一本の道標が目の前にまごう事なく立っている。私は行かなくてはならない。ひとつの道を、まだ何びとも戻って来た事のない道を：

《死と乙女》で乙女に語りかける死の声の優しさ。《美しき水車小屋の娘》では失恋の心痛を小川に語り、最後にはその「優しい」小川に身を投げて死を選ぶ者と、最終的な安住の地としての「死」。《さすらい人》と《冬の旅》に共通する「漂泊の旅」とその目的地としての死。

ベートーヴェンを神のように尊敬し、葬儀ではたいまつを持って棺に連れ添ったほどのシューベルトだが、その音楽はベートーヴェンのように「運命に打ち勝って歓喜に至る」といった強い意志のうかがえるものは正反対の内容を持ち合わせている。他人には打ち明けられないたくさんの思いを、シューベルトはその音楽に託して訴えていたのであろう。「長調と短調の区別が不明瞭で作品の流れにしまりが無い」などと酷評されることさえあるシューベルトの音楽も「愛の歌はいつの間にか心の痛みに変わり、苦悩の歌は知らずに愛の歌となっている」と語る彼自身の気持ちと、生涯心から離れることのなかった「安息を得られない漂泊と孤独感」に思いを馳せてみると、その音楽も、もっと身近な人間味に溢れたものに聞こえてくるのではないだろうか。

フランツ・リスト

フランツ・リストはピアノを勉強する人が遅かれ早かれ遭遇し、避けて通ることのできない作曲家の一人だろう。しかしピアノニステイックな技術訓練面以外にも、リストは現在に至る音楽界に有形無形さまざまな影響を及ぼしている。

そのひとつとして、我々にとってはすでに自明のものとして誰もが疑問をさし挟まない「リサイタル」というコンサート形式を成立させるにあたって、リストが重要な役割を果たした、という事実が挙げられる。

当時のコンサートは、歌あり、器楽演奏あり、ソロはもちろん、そしてアンサンブルも、といった複数のアーティストによる合同演奏会的な形式で行われていた。当然の事ながら一回のコンサートの長さもかなり